『微笑』論

――横光利一の戦中・戦後――

黒田大河

一

『微笑』は「人間」昭和二十三年一月号（第三巻第一号）に発表された後、単行本『微笑』（昭和二十三年三月二十五日、斎藤書店）に収められた。横光利一は昭和二十二年十二月三十日に没し、『微笑』は遺作となる。それゆえ、この作品を論じることは二つの意味を持つことになった。戦後、横光がどこにたどり着いたか、そしてどこに行こうとしていたか、という二点である。同時代にも平野謙が「昭和文学最大の犠牲者としての横光利一にふさはぬでもない最期」[1]を見る一方、中山義秀は「みづみづしさと或る変化を示さうとする作家精神の胎動を感じた」[2]としていた。

遺作となったことは偶然にせよ、『微笑』は作品系列から言っても重要な作品である。神谷忠孝の名付けた「梶もの」[3]の中でも「梶」が「東北のある海岸の温泉場」に「ヨーロッパを廻つて来て疲れを休めに来てゐる」という『厨房日記』（昭和十二年一月、「改造」第十九巻第一号）以降の作品、『終點の上で』（昭和十六年一月、「中央公論」第五十六巻第一号）、『恢復期』（昭和十六年四月、「改造」第二十三巻第七号）、『罌粟の中』（昭和十九年二月、「改造」第二十六巻第二号）では「梶」は横光自身を思わせ、常に『旅愁』と歩みを共にしている。『厨房日記』がヨーロッパの知識階級の現況に東北の温泉場の状況を対峙させ『旅愁』の前奏的な作品だとすれば、『終點の上で』は東北の温泉場にその共同体から逸脱した狂女の微笑を対峙させ『厨房日記』の後日談的作品。『恢復期』では戦時下のパリから帰朝する青年と戦時体制下の日本で神憑り的状況に陥った青年を対峙させ、『罌粟の中』ではハンガリーでの平和と日本を対峙させ東西の調和を描くという具合である。「梶」が「旅愁」

を書いた作家として登場する『微笑』は、戦後になってあえて『旅愁』を書いた自己自身を対象化しようとした作品であり、横光はそこからどこへ向かおうとしたのか。

『微笑』から神谷忠孝は「現実をあるがままにみつめようという作家姿勢④」という変わらないものを見、他方、二瓶浩明は「戦後横光の夢崩れ果てた悲痛な心象風景⑤」を、芹澤光興は「《大東亜戦争》に夢を託した自分自身への鎮魂⑥」という転機を見る。このような戦中から戦後への連続と非連続をまとめれば次の菅野昭正の評となろう。

横光利一は、一方では狂気へ追いこまれてゆく栖方を通して、戦争という罪の時間へと遡って生き、もう一方では、栖方という贖罪山羊を戦後の文学界の荒野へ送りとどけながら、語り手梶として敗戦後の《現在》の時間を生きていた。⑦

傾聴すべき見解だと思われるが、戦後から見た戦中が「罪の時間」であったにせよ、戦中から見た戦後もまたそこに対峙する。そのような相対的な構図が「梶もの」の特色のはずである。『微笑』の達成と、横光の可能性を、作品に即して考察してみたい。

二

井伏鱒二の回想⑧によれば、昭和十九年十月に横光から『微笑』の構想を聞いたという。鷲尾洋三も次のように記している。

モデルになつた青年にはついぞ会つたことはないが、横光さんは好んで僕に、その青年の話をして聴かせた。（中略）話の模様では、どう見ても半狂ひとしか思へない、その若い科学者の言動とその手で進行しつつあるといふ素晴らしい新兵器の話を、横光さんは少しばかり照れながら、しかし只事でない情熱を以て描写した。⑨

戦時下の横光は「梶」のごとく「栖方」のモデルとなった青年の語る新兵器を信じていたのだろうか。あるいは「殺人光線」を信じていたのだろうか。また、何故戦後になってからそのことを作品化しなければならなかったのか。戦後の目でみれば横光は信ずるべくもないことを信じていたように見える。

作品中に、梶が東北の疎開先で新聞に次のような記事を見つける場面がある。

技術院総裁談として、わが国にも新武器として殺人光線が完成されようとしてゐたこと、その威力は三千メートルにまで達することが出来たが、発明者の一青年は敗戦の報を聞くと同時に、口惜しさのあまり発狂死亡したといふ短文が掲載されてゐた。

横光自身が疎開先でどんな新聞を読んだかは定かではないが、現実にも次のような新聞記事を見ることが出来る。

わが電波兵器の権威前技術院総裁八木秀次博士が米人記者の問に答へて「日本で殺人光線も研究してゐた、その一つは飛行機の点火装置を止めるものでした、（中略）他の光線は動物を殺傷するもので兎などは四十ヤードくらゐ離れてゐて殺すことが出来た」と語つたがわが国の新兵器殺人光線とはどんなものであつたか、連合軍は七日つぎの通り発表した[10]

この後に「米軍総司令部渉外局」の発表が続く。「日本の科学者団は五年半以前に殺人光線について共同研究を開始したが、戦争終了までにやつと三十米の距離で十分かゝり鼠一匹を殺す程度の段階に達したに過ぎなかつた」「戦争終了当時の設計においては殺人光線装置の力の供給源として比較的強力な真空管を使用し十分間に一千米の距離で鼠を死に至らしめ得ると予想されるに至つてゐた[11]」などとあり、『微笑』の虚構は明かである。横光がこれらの記事を読んでいた可能性は充分あると思われるが、何故戦後になっても自らの虚妄を正そうとはしなかったか。何故「三十米」ではなく「三千メートル」を信じているふりをしなければならなかったか。

だが、これらの問いかけは戦後の目から見たものであった。戦時下に目を移し、井伏や鷲尾の回想を見れば、横光は知り得べからざることを知り、信じていたことになるのである。作品中にも度々憲兵は登場するが、当時の憲兵隊の言論弾圧がどのようなものであったかは言うまでもないだろう。『近代庶民生活誌』第四巻[12]に収められた「憲兵司令部資料」をひもとけば、学校や教会での談話から近所の世間話までもが取締の対象となり、「厳諭」され時には「検挙」されていたことがわかる。「殺人光線」が戦後の目から見れば子供だましであったにせよ、当時重要な軍事機密であったことは間違いない。例えば昭和十九年九月二十四日に次のような「流言」の記録がある。

新兵器付軍属一五〇名ハ所沢飛行場ヨリ飛行機八〇機ニ分乗ボルネオニ出発シタガ此ノ新兵器ハ電波デ敵機ノ発動機ヲ止メテ落スモノダ[13]

戦後の記事からみて驚くほど正確な情報である。ただし、真実に近いものが必ずしも検挙されるとは限らず、この場合も「臆測」であるとし「厳諭」で済んでいる。当時の情報管理の老獪さが窺われる。つまり、何が真実で何が嘘であるかが見えないような時空がそこに成立していたと言える。横光もまたそのなかに居た。そして敗戦後、『微笑』の言葉で言えば「みな零になつた」後に、横光は素材としての青年と殺人光線、それを信じようとしていた自己自身を対象化し作品化し得たのではないだろうか。大本営発表の虚妄が明らかになり、流言や噂にこそ真実が含まれていたことが見えてくる時、敗戦と同時に反転する現実の中で初めて横光は戦中の時空を作品化し

得たのである。

作品内で梶が高田から栖方のことを初めて聞く場面に次のようにある。

このやうな話の真実性は、感覚の特殊に鋭敏な高田としても確証の仕様もない、ただ噂の程度を正直に梶に伝へてゐるだけであることは分つてゐた。しかし、戦局は全面的に日本の敗色に傾いてゐる空襲直前の、新緑のころである。噂にしても、誰も明るい噂に餓ゑかつえてゐるときだつた。（傍点引用者）

栖方の話が噂と同様であること、またそれが確かめようもないこと、そして「日本の敗色」の中で噂をもとめる時空が成立していることが記されている。噂が時には真実でもあり得ることも、梶が栖方との談話で「新武器のことについて訊きたい誘惑を感じたが、国家の秘密に栖方を誘ひこみ、口を割らせて彼を危険にさらすことは、飽くまで避けて通らねばならぬ。」と考えていることで描かれているのである。

また、先の引用で注目したいのは「戦局は全面的に日本の敗色に傾いてゐる空襲直前」という時間の捉え方である。梶の妻がおそらく噂から「もうすぐ空襲が始るさうですが、恐いですわね。」と言っているように、ここでは噂によって時間の流れが先取りされているのである。情報が管理される中で、大本営発表への不信や、米軍の宣伝ビラ（宣単）などから発する噂が、時間をねじ曲げ、語り手もまた「空襲直前」という時間の捉え方をする。このように考えると、菅野昭正が指摘している[14]レイテ戦の時間の齟齬も語りの特殊性として理解出来はしないか。

もう海軍力はどこの海面のも全滅してゐる噂の広がつてゐるときだつた。レイテ戦は総敗北、海軍の大本山、戦艦大和も撃沈された風説が流れてゐた。（傍点引用者）

確かに、歴史的にはレイテ戦は昭和十九年十月以降である以上、次の場面に「九月ちかく」と出てくるのは小説の構成上の不備だと言える。が、大本営発表が信用し難いという戦中の「噂」「風説」の時空が語られているとすればどうか。レイテ戦について新聞報道を見てみると、「敵艦隊、船団を伴ひ／比島レイテ湾侵入」に始まり「レイテ湾の敵上陸開始／無謀な強引上陸／大半を水際で叩く」「空母二、戦艦二屠る」「五十五隻を屠る」「六十四隻撃沈破[15]」と戦果を発表し続ける。だが、いっこうに戦局は収拾せず、十一月に入ると「神風特別攻撃機隊」「萬朶飛行隊」などの「必殺の体当り[16]」が語られるばかりである。「憲兵司令部資料」によれば、すでに十月「敵ガ未ダレイテ島ニ遊戈シテ居ル処ヲ見ルト我艦隊ハ遁走シタノダラウ」という流言が全国で「三八件[17]」見られるという。別の資料では年が明けてからは「レイテノ皇軍ハ玉砕シタ[18]」との流言が多く見ら

れる。報道は次第に虚妄となり、噂は次第に真実に近づくのである。大和のことについても昭和十九年六月にはすでに「軍艦大和ハサイパン戦テヤラレタ」[19]との噂が流れている。『微笑』の語りはこのような捉え難い戦中の噂の時空を描写しているのではないだろうか。

以上のように『微笑』に於いては、何が真実で何が虚妄であるかが見えない噂の時空が定着されているのである。作品中では「排中律」という言葉にそれは託されている。

現に世界はあるのだ。そして、争つてゐるのだつた。真理はどこかになければならぬ筈にもかかはらず、争ひだけが真理の相貌を呈してゐるといふ解きがたい謎の中で、訓練をもつた暴力が、ただその訓練のために輝きを放つて白熱してゐる。

横光は戦争をこのように真理の見えない争いと捉えている。噂の時空の中では真偽を判断する方法はない。そのことは、戦後に反転した現実の中で初めて見えてきたのである。しかし、戦後の現実をすぐさま真実として受け入れることが出来るだろうか。戦後の時空もまた占領軍の情報統制のもとにあった。横光にとって「戦争が敗北に終らうと、勝利にならうと、同様に続いて変らぬ排中律の生みつづけていく難問たることに変りはない」のである。『微笑』の作品世界はこのような戦中から戦後への、また戦後から戦中への問いかけを描き出す試みであった。

三

前章で見たような作品世界が定着されるためには、独特の語りの方法が必要であった。『微笑』の語り手は「梶」という登場人物に焦点化[20]している。一方、一人称の語り手ではないため、「梶」を対象化して語ることもあり得る。図式的に言えば、語り手は「梶」よりも多くのことを知っているのである。だが、語り手は「梶」を対象化しながらも、「梶」の知っている以上のことを敢えて語らないように思われる。それ故、「梶」の認識の真実性には疑問が付されながらも、その真偽は明らかにならない。そこに排中律に象徴される相対的な時空が成立するのである。

作品の冒頭は以下のようにして始まる。

次の日曜には甲斐へ行かう。新緑はそれは美しい。そんな会話が擦れ違ふ声の中からふと聞えた。さうだ。もう新緑になつてゐると梶は思つた。季節を忘れるなどといふことは、ここしばらくの彼には無いことだつた。

語り手は、梶に焦点化し、誰ともない人々の囁きを書き留める。また、梶の内面の声を記す。ここで「新緑」の季節が、後に「それも新緑の噴き出て来た晩春のある日のことだ。」と語り出される「栖方」の記憶につながることは従来指摘されている通り明らかだが、

もう一つ注目すべきことは、語り手が梶を対象化し「季節を忘れるなどといふことは、ここしばらくの彼には無いことだつた。」と記すことだ。つまり、語り出された時点以前の梶は時間的な流れを強く意識させられていたということである。続く部分で話題は現代の狂気に移り、医者が「こんな患者は、今は珍らしいことではありません。」と言うのに、記者が「今の日本には、少しをかしいのが、五百萬人ぐらゐはゐる」のですねと問い、「五百萬人の狂人の群れが、あるいは今一斉にかうして笑つてゐるのかしれない。」と「今」が強調されているのも偶然ではない。歴史的時間の止められない流れの中にいた梶が、ふと時間を忘れ、「新緑」からの記憶に誘われるのが【微笑】の語り出しであった。栖方の記憶が「今」と異質な時間の中にあることを示している。また、次のようにも語られる。

長く尾をひくこの笑ひ声を、梶は自分もしばらく胸中にゑがいてみてゐた。すると、しだいにあははははがげらげらに変つて来て、人間の声ではもうなかつた。何ものか人間の中に混じつてゐる声だつた。

自分を狂人と思ふことは、なかなか人にはこれは難しいことである。さうではないと思ふよりは、難しいことであると梶は思つた。それにしても、いまも梶には分らぬことが一つあつた。人間は誰でも少しは狂人を自分の中に持つてゐるものだといふ名言は、忘れられないことの一つだが、中でもこれは、かき消えていく多くの記憶の中で、ますます鮮明に膨れあがつて来る一種異様な記憶であつた。

語り手は誰の中にも狂気は潜んでいるというメッセージを繰り返す。梶の「胸中」にも狂気が「混じつてゐる」のである。栖方の記憶が「異様」なのは、梶自身にも事の真実性が「分らぬ」からである。栖方の狂気と梶の狂気の双方を語り手は語るために、梶の記憶をひもとくのである。

栖方のエピソードに対して、梶がその真実性を計る部分に注目してみよう。初めて高田から栖方の話を聞いたときには「夢のやうな幻影としても、負け苦しむ幻影より喜び勝ちたい幻影の方が強力に梶を支配してゐた。」と梶の「幻影」への欲望が記される。また「高田の話そのものだけを事実としてみれば、希望と幻影は同じものだつた。」と、梶の希望と幻影が同じものに過ぎないことが示唆される。だが、栖方の真実性は微妙に保たれる。栖方との出会いの場面から抜き出してみよう。

①有象無象の大群衆を生かすか殺すか彼一人の頭にかかつてゐる。これは眼前の事実であらうか、夢であらうか。とにかく、事はあまりに重大すぎて想像に伴なふ実感が梶には起らなかつた。

②空中楼閣を描く夢はアインシュタインとて持つたであらうが、

いまそれが、この栖方の検閲にあつて礎石を覆へされてゐるとは、これもあまりに大事件である。梶にはも早や話が続かなかつた。栖方を狂人と見るには、まだ栖方の応答のどこ一つにも狂ひはなかつた。

①では、語り手は栖方の真実性を留保しながら、梶の戸惑いを語る。②では梶の驚きと栖方の応答に狂いがないという梶の感想を語る。だが、どちらも客観的な判断の基準は語られない。それゆえ、②の相対性理論の件を隠喩としてとれば、すべてが仮定の上に成り立った空中楼閣でもあり得る訳である。だが、憲兵から栖方の発狂を告げられた後でも「みな栖方の云つたことは嘘だつたのだらうか。それとも、――彼を狂人にして置かねばならぬ憲兵たちの作略の苦心は、栖方のためかもしれないとも思つた。」という梶の感想以上の判断は下されない。真偽の判断基準がないため真実性は留保される。栖方が、天皇に拝謁した報告に、梶を訪ねた場面に「すべて真実だと思へば真実であつた。嘘だと思へばまた盡く嘘に見えた。」とあるのが、この語りによって成立する時空の特殊性をよく表している。

梶の心理における動揺は、父島での実験のことを聞くに及んで極まる。

異様な事件が不思議と真実の相をおびて梶に迫つて来始めた。

では、みな事実か。この青年の口走つてゐることは――

（中略）

もう冗談事ではなかつた。どこからどこまで充実した話か依然疑問は残りながらも、一言ごとに栖方の云ひ方は、空虚なものを充填しつつ淡淡とすすんでゐる。梶は自分が驚いてゐるのかどうか、も早やそれも分らなかつた。

語り手は梶の実感を強調し、内面の声を記す。だが、その根拠は語らない。さらに、梶を対象化し、判断の基準を見失った梶の姿を描写するのである。

以上のように、語り手は栖方の真実性に捉えられて行く梶を描いている。梶を対象化しつつも、梶の知り得る以上のことを語らない語りによって、読者は栖方に対して真偽を判断できないのである。それが噂の時空に酷似していることは言うまでもない。

一方、特に水交社に出かける場面前後には、読了後に反転する真偽の判断の仕掛が施されてもいる。その一つは栖方の階級である。二度目の訪問で、栖方は軍服を身につけていて「中尉の肩章はまだ栖方に似合つてはゐなかつた。」とある。三度目の訪問での、天皇に拝謁したことについての梶と栖方の対話には「陛下は君の名を何とお呼びになるの。」「中尉は、と仰言いましたよ。」とある。その後の栖方の言葉では「今日はおれ、大尉の肩章をつけてゐるけれど、本当はもう少佐なんですよ。あんまり若く見えるので、下げてゐん

です。」ともある。果たして、栖方の階級は本当は何だったのか。梶と栖方の最後の接触の後に、次のようにある。

栖方と別れて一ケ月もしたとき、句会の日の技師から高田にあてて、栖方は襟章の星を一つ付加してゐた理由を罪として、軍の刑務所へ入れられてしまつたといふ報告のあつたことと、空襲中、技師は結婚し、その翌日急病で死亡したといふ二つの話を、梶は高田から聞いただけである。

そもそもこの情報には、技師（伊豆）と高田という二人のフィルターがかかっているのだが、それを別にしても栖方の階級は判断出来ない。天皇への拝謁自体が、栖方によって語られている以上、中尉という前提自体不確定でさえある。栖方の階級章が作品中で実際に効果を発揮する場面を見よう。

栖方の大尉の襟章を見て、隊長の下士が敬礼ッと号令した。ぴたッと停つた一隊に答礼する栖方の挙手は、隙なくしつかり板についたものだつた。軍隊内の栖方の姿を梶は初めて見たと思つた。

梶が「思つた」という語りに注目したい。あくまでも梶の判断であることが語られる。また、「襟章を見て」という表現は、大尉という称号が記号として軍隊内で通用する様を語ると同時に、その記号が空虚なものである可能性にも容易に反転してしまうのである。また、栖方が恩賜の軍刀を友人に借りたと嬉しげに語る場面や、勲章の功一級をもらうかもしれないと語る場面は、栖方が階級を詐称していた伏線とも読めるのである。

以上のように栖方の階級について語り手は、意図的に不確定な要素を織りまぜつつ語っていた。それゆえ先の栖方が投獄されたというくだりに戻って考えてみると、その投獄が栖方の妄想からくる階級の詐称によるのか、それとも軍の偽装なのか、解釈は反転する。また、同時に語られていた技師の死は、栖方の真実性を不明確にするとともに、「先日も優秀な技師がピストルでやられました。」と初めての来訪の時栖方が語っていたことを考えると、それも偶然とばかり言えなくもなる。そこでも解釈は反転するのである。

以上のような語りの技法が、栖方の真実性を決定不能にすると同時に、梶自身の問題へとベクトルを向ける。栖方の真実性を宙吊りにする語りは、結果的に次のような定着を見る。栖方の「学位論文通過祝賀俳句会」の場面である。

ふと梶は、すべてを疑ふなら、この栖方の学位論文通過もまた疑ふべきことのやうに思はれた。それら栖方のしてゐることごとが、単に栖方個人の夢遊中の幻影としてのみの事実で、真実でないかもしれない。いはば、その零のごとき空虚な事実を信じて誰も集り祝つてゐるこの山上の小会は、いまかうして花の

やうな美しさとなり咲いてゐるのかもしれない。さう思つても、梶は不満でもなければ、むなしい感じも起らなかつた。

「日ぐらしや主客に見えし葛の花」と、また梶は一句書きつけた紙片を盆に投げた。

主人と客がともに「空虚な事実」を慶賀し、主体と客体の一致した空間。その場だけの「真実」に対する肯定が語られている。これは、作品冒頭の語りだしとの関連で言えば、「今」の歴史的時間の流れとは異質な時空が定着されたことを意味するのである。

四

以上をまとめれば、『微笑』の達成とは戦後になって戦中の噂の時空を対象化し得たことであり、そのために「梶もの」としての梶の設定が語りの方法として最大限に生かされたのである。戦後から戦中を断罪するだけではなく、戦後と戦中の時空が相互に問いかけを発するような構造が成り立っていた。

それでは横光は『微笑』を書くことでどのような可能性を見ていたのだろうか。作品の末尾を引用する。

それにしても、何より美しかつた栖方のあの初春のやうな微笑を思ひ出すと、見上げてゐる空から落ちて来るものを待つ心が自ら定つて来るのが、梶には不思議なことだつた。それはいまの世の人たれもが待ち望む一つの明晰判断に似た希望であつた。それにも拘らず、冷笑するがごとく世界はますます二つに分れて押しあふ排中律のさ中にあつて漂ひゆくばかりである。梶は、廻転してゐる扇風機の羽根を指差しぱッと明るく笑つた栖方が、今もまだ人人に云ひつづけてゐるやうに思はれる。

「ほら、羽根から視線を脱した瞬間、廻つてゐることが分るでせう。僕もいま飛び出したばかりですよ。ほら。」

栖方の微笑とは戦中戦後を貫く排中律に象徴される世界への問いかけであり、「明晰判断に似た希望」である。『夜の靴』の一節に「プロペラの廻転を停めるやうに、私は一度、ぴたりと停つた世の中といふものを見てみたい。これだけはまだ誰一人も見たことのないものだが。[21]」とあったことと考え合わせれば、排中律の世界から「飛び出し」て「世の中」を見つめるという作家的立場を横光は希求していたとひとまずは言えるだろう。

しかし、「誰一人も見たことのないもの」を見つめることは容易ではあるまい。『微笑』の中で梶が栖方に「誰にもすがれないところへ君は出たのさ。零を見たんですよ。」と語っているが、まさに敗戦後「みな零になつた」地点に横光は立っていた。『旅愁』の最終章となった「梅瓶」で、作家である東野に原子核の「憂ひ」についてこう語らせている。

御承知のやうに、物の本質をなすこの微粒子の中心には、刎ねつけあふ電気の争ひと、磁力の牽きあふ愛情とがあります。しかし、何ゆゑにその二つのものが、一つのものの中にあるかといふ憂ひの根幹の詮索に、地球上の全物理学者の関心が高まりました際になつて、突如として、このたびの戦争が起つて参りました。そして、その憂ひの根本も分らなくなつたのであります。再び空空漠漠――[22]

排中律を乗り越える立場を『旅愁』で夢見、模索し続けた横光は、敗戦後、空漠たる思いのまま再び排中律の世界と対峙し続けなければならなかったのである。それを悲劇と見るにせよ喜劇と見るにせよ、『微笑』の達成と問いかけは厳然として残るのである。

注

① 平野謙「翫賞家の批評」、「文芸」第五巻第三号、昭和二十三年三月。
② 中山義秀「花園の思索者」、「新文学」第五巻第三号、昭和二十三年三月。
③ 神谷忠孝「『微笑』ノート」、由良哲次編『横光利一の文学と生涯――没後三十年記念集――』（昭和五十二年十二月三十日、桜楓社）所収。
④ ③に同じ。
⑤ 二瓶浩明「横光利一『微笑』小論――『旅愁』との関連において――」、「山形女子短期大学紀要」第十三集、昭五十六年三月。
⑥ 芹澤光興「夢からの『微笑』」、「名古屋短期大学研究紀要」第二十一号、昭和五十八年五月。
⑦ 菅野昭正『横光利一』、一九九一年一月二十七日、福武書店、二十一頁。
⑧ 井伏鱒二「埋草」、改造社版『横光利一全集月報』第十七号、昭和二十四年十月。
⑨ 鷲尾洋三「素朴と誠実さ」、改造社版『横光利一全集月報』第九号、昭和二十三年十二月。
⑩ 昭和二十年十月八日「毎日新聞」（大阪版）の「日本の殺人光線／米調査団が解剖／三十米離れて鼠を殺す／研究五年半・兵器には無価値」の記事、「読売報知」九日号にも同様の記事を見ることが出来る。ただし、技術院総裁の談話は「毎日新聞」でしか見ることが出来ない。
⑪ ⑩の「朝日新聞」より引用。「朝日新聞縮刷版昭和二十年下半期」（日本図書センターによる復刻版、昭和六十二年三月二十五日）を用いた。「毎日新聞」「読売報知」も同様の内容である。
⑫ 南博他編『近代庶民生活誌』第四巻「流言」、一九八五年二月十五日、三一書房。
⑬ 「十月中ニ於ケル造言飛語」憲兵司令部、昭和十九年十二月十五日、⑫に所収。
⑭ ⑦に同じ、十七頁。
⑮ すべて「朝日新聞」より引用。「朝日新聞縮刷版昭和十九年十月～十二月」（日本図書センターによる復刻版、昭和六十二年五月二十五日）による。順に昭和十九年十月二十日、同二十二日、同二十三日、同二十七日、同二十八日。
⑯ ⑮に同じ、十一月四日、同十四日。

⑰ ⑬に同じ。

⑱ 「東京（東部）憲兵隊資料」より「流言蜚語流布状況ニ関スル件（一月分）」、⑫に所収。

⑲ 「九月中ニ於ケル造言飛語」憲兵司令部、昭和十九年十一月六日、⑫に所収。

⑳ 「焦点化」の用語はジェラール・ジュネットの提唱によるもので、「誰がみているのか、という問題と、誰が語っているのか、という問題（傍点原文）」（花輪光、和泉涼一訳『物語のディスクール』一九八五年八月三十日、水声社、二百十七頁）を峻別するために用いられる。

㉑ 初出は「夏臘日記」、季刊「思索」第二号、昭和二十一年七月。他に「木蠟日記」（「新潮」第四十三巻第七号、昭和二十一年七月）、「秋の日」（「新潮」第四十三巻第十二号、昭和二十一年十二月）、「雨過日記」（「人間」第二巻第五号、昭和二十二年五月）として発表。『夜の靴』（昭和二十二年十一月二十五日、鎌倉文庫）としてまとめられる。

㉒ 「梅瓶」、「人間」第一巻第四号、昭和二十一年四月。

付記 『微笑』『夜の靴』の引用は『定本横光利一全集』第十一巻（昭和五十七年五月三十日、河出書房新社）により、旧漢字は新漢字に改めた。引用資料については、常用漢字表にあるものは現在の字体に従った。また、引用注に於ける西暦と元号の別は奥付けの表記に従った。